目白大学　総合科学研究
８号　2012年３月　83－92

フレーム・コンテント仮説の一検証

A Study of Frame Content Hypothesis

宮原　温子
（Miyahara Atsuko）

Abstract :

Contemporary Japanese society's social bilingualism is one where a growing bilingual group and a monolingual group exist side by side, rendering it to a multilingual society.

In informal settings, bilingual speakers often engage in code switching (hereafter CS), i.e. switching languages. However, CS is sometimes seen negatively. On the other hand, Azuma (1990, 1993, 2000)'s Frame Content Hypothesis (hereafter FCH) states that because intrasentential CS happens when content words are inserted into a sentence whose grammatical frame has already been established, intrasentential CS is grammatically legitimate. In this paper, first, intrasentential CS is examined in author's conversation materials; second, intrasentential CS is confirmed as content words' intrasentential CS; and thirdly, these intrasentential CS of content words is found to act as a base for establishment of a new frame. Studying FCH not only allows for the verification of grammatical legitimacy of intrasentential CS, but also allows for a better understanding of the conversation style of bilingual speakers. In a multilingual society, it is important to recognize and to accept bilingual and multilingual speakers' various conversation styles.

キーワード： 多言語社会・社会的バイリンガリズム・コードスイッチング・フレームコンテント仮説

Keyword： multilingual society, societal bilingualism, code-switching, frame-content hypothesis

１．はじめに

山本（1991, p.105）[1]は「少なくとも現時点では（バイリンガリズムは）まだ個人のレベルのものであり、諸外国に見られるように、一つの社会階層を成すような社会レベルのものというまでには至っていない」と言っている。Furuya（1999, p.30）[2]は "Although Japan on the whole, is primarily a monolingual society, there is a community of English/Japanese bilingual speakers,"「日本は全体的に見ると元来日本語のモノリンガリズムの社会だが、英語と日本語のバイリンガル話者のコミュニティーがあり、」（筆者拙訳）と言っている。その後のバイリンガルのコミュニティーの増加と拡大を促すきっかけとなる人の動きを数字で示してみよう。平成20年末における外国人登録者数は2,217,426人で、引き続き過去最高記録を更新している。この数は、前年に比べ64,453人（3.0％）の増加、10年前（平成10年末）に比べると705,310人（46.6％）の増加で、10年間で外国人の登録者数は約1.5倍になっている。出身国別でみると、中国の29.6％を筆頭に、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピン、ペルー、米国と続いている[1)]。また、法務省による国籍留保数[2)]をみると、1986年には4,462人であったのが、1996年には9,881人、2006年には15,050人と、増加していること

みやはらあつこ：留学生別科　非常勤講師

がわかる。外務省による海外在留邦人数調査統計の地域別子女数[3]の総数をみると1986年は39,393人であったのが、1996年は50,080人、2006年は58,304人となり、増加していることがわかる。また、日本大手企業の中には、社内使用言語を英語とする企業も出てきた。これらから、バイリンガルのコミュニティーが拡大し、多言語社会になりつつあることが考えられる。

バイリンガルは、インフォーマルな会話の中でコードスイッチング（以下、CSと記す。）をする。バイリンガル能力は、早期英語教育[4]が導入されたことからも明らかなように、一般社会では肯定的であり社会的ニーズが高いが、CSに対しては無理解や否定的な見方がある。Appel and Muysken（1987, p.117）[3]は、専門家がCSを研究する一方で、多くの専門家でない人たちは一つの会話において二つの言語が混在することは言語的衰退であり、少なくとも一つの言語が十分に発達していない、でたらめな結果だと酷評していると言っている。Kite（1996, p.188）は神戸にあるインターナショナルスクールの高校生によるディスカッションの発言の中から、高校生が一般人から話し方について叱責されたことを取り上げている。電車の中で高校生が友人とCSをしながら話していると、日本人が日本語で（一つの言語で）話すようにといらいらとした調子で高校生に言ったという。中島（1998, p.157）[5]は日本人学校卒業生[5]の会話力を評価する中で「日本語の単語に詰まると、すぐに英単語を使ってしまう例が多く」として、日本語を話しながら英語の名詞や形容詞の混用があること、また、『「hm」「ok」「sure」など、会話の円滑油とでもいえるものが英語になると言うケースもあった』（下線は筆者記入）と述べている。また、海外に住む日本人家庭の使用言語と子弟の日本語力の関係を述べる中で、『家庭で両言語をランダムに使う「混用型」の生徒は日本語の全ての点で劣っており』としている。これらから見えてくるのは、バイリンガルがCSをすることにも、バイリンガリズムが動的であることにもかなり否定的だということである。筆者に会話資料を提供してくれたインフォーマント自身からも、CSは正しい話し方ではない、CSをしないように家族から注意されている、自らもCSは正しくないのでCSはしないようにしている、という意見が出た。もっとも、インフォーマントの中にはCSを肯定的に受け止め、ごく自然なものだと捉えている人もいた。

いずれにしても、CSは様々な機能を持っており[6]、CSはバイリンガルのインフォーマルな会話の中において、至極当然な現象である。小論では、日本語英語バイリンガルの会話資料を用いて、Azumaが提唱したフレーム・コンテント仮説（Azuma1990[6]、1993[7]、東2000[8]）（以下、FCHと記す。）の一検証を試み、CSの文法的正当性を示す。それによって、バイリンガルの会話スタイルの理解の一助としたい。

2．バイリンガルとCS

（1） 社会的バイリンガル

バイリンガルの定義には幅があるが、小論では、「二つの言語で意味のある、まとまった内容をコミュニケートできること、あるいは、できる人」とする。

Appel and Muysken（1987, p.1）はバイリンガリズムを“Generally, two types of bilingualism are distinguished: societal and individual bilingualism.”「一般的に個人的バイリンガリズムと社会的バイリンガリズムの二つのタイプに分けられる。」（筆者拙訳）とし、世界のほとんどの社会がバイリンガルであり、社会的バイリンガリズムを理論的に三つのタイプに分けられると述べている。

社会的バイリンガリズムの一つ目は“In situation I the two languages are spoken by two different groups and each group is monolingual; a few bilingual individuals take care of the necessary intergroup communication.”「モノリンガルのグループが二つ存在し、少数のバイリンガルが二つのグループ間のコミュニケーションを担う社会的バイリンガリズム」である。二つ目は“In society of type II all people are bilingual.”「その社会の全ての人々がバイリンガル」というものである。三つ目は“In the form of societal bilingualism

one group is monolingual, and the other bilingual.”「一つの社会にバイリンガルのグループとモノリンガルのグループがある社会的バイリンガリズム」（いずれも筆者拙訳）である。

日本はこれら三タイプのうち、三つ目のものに近いと言え、バイリンガルのグループが増加し、拡大していることが考えられる。バイリンガルグループの構成員として、在日韓国人、アイヌ、ブラジル等からの日系人、日本生まれの外国籍の子どもたち、留学生、帰国子女、外国人学校の生徒、海外からの企業派遣者とその家族など様々考えられる。

（2） CS

ガンパーズ（2004, p.73）[9]はCSを「二つの異なる文法システムに属する会話の一節を、ことばの一連のやり取りの中で並置すること」と定義づけている。Appel and Muysken（1987, p.118）は使用言語の切り替えが現れる文の中での位置、語の単位によって、タグスイッチングとコードミキシングとCSの三つに分け、文単位での切り替えのみをCSとしている。岡（1995, pp.122-125）[10]は使用言語の切り替えの場所や単位にこだわらないCSの定義を示している。岡はCSを発話者が交替する時、文と文の切れ目、一つの文の中、いずれにも現れるものとしており、文と文の切れ目に表れるものを文間CSといい、一つの文の中に現れるものを文中CSと呼んでいる。筆者は岡によるCSの定義を援用する。下に、文中CS（下線部分）を示す。

〔例１〕No it’s higher ‘cause the one right now is <u>中級</u> I think.（筆者による採取資料より。2007年12月27日採取）

文間CSは、一つ一つの文が、それぞれの言語で完結しているため、その文の範囲内で文法的正当さが問われることはない。しかし、文中CSにおいては、往々にして文法的正当さが問われるようである。

３．FCH

Azuma（1990, p.31）はFCHを以下のように提唱している。

“Frame-Content Hypothesis: Content words may be code-switched within a grammatical frame defined by functioned words.”「フレーム・コンテント仮説：内容語は、機能語で規定された文法的フレームの中でコードスイッチングすることがある。」（筆者拙訳）

また、Azuma（1993, p.1071）は、発話誤用をデータとして提唱された最も影響のあるspeech-production modelsの一つであるGarrett（1982, p.50）[11]によるモデルの一部を引用して、それをFCH[7]と呼ぶとしている。以下が、Azumaが引用したGarrettのモデルの一部である。

“involves the assignment of segmentally specified major category items to sites in a surface phrasal planning frame which bears inflectional elements and minor category free forms”「言語産出は屈折（語）の要素とその小範疇の自由形式を有する、表面的な句を作るフレームの中において、分節状に特定された大範疇項目のサイトへの割り当てを含む」（筆者拙訳）

内容語とは、名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞などある程度の意味内容を持つ語であり、名詞句、名詞節のように形態素よりも大きな単位である句・節も含まれる。一方、機能語とは、時制、態などを示すもの、接辞、冠詞、助動詞、前置詞、後置詞など主に文法的な働きをするものである（東2000, p.68）。機能語は、それだけでは意味を表すことができない。

FCHでは、文を産出する際に、２段階のステージを経ていると考えられている。まず、ある程度の句や節といった文法的まとまりが構築される段階がある。これをフレーム構築ステージと言う。この段階では機能語がある程度フレームの一部となっている。次の段階は、構築されたフレームの中に内容語が入る段階であり、これを内容語挿入ステージと言う。最終的には、これらの情報が音声処理部門に送られ、発声されることになる。FCHでは文中CSは内容語挿入ステージで現れるとする。よって、両ステージでの言語が同一であれば、文中CSがないことになる。

フレームの言語をマトリックス言語と言い、

文中で切り替わった言語をゲスト言語と言う。基本的に主節の述部の文法的フレームを成している言語がマトリックス言語になる。内容語の言語が切り替わった文も、マトリックス言語の文法に支配され、挿入された内容語の言語はマトリックス言語の文法には抵触しない。また、句や節という単位で使用言語が切り替わった場合は、文全体としてはマトリックス言語が支配しているが、句や節の中では、その句や節を構築している言語が文法的に支配する。同時に、句や節の中で言語の切り替えは内容語において可能である。つまり、文中CSが起きた場合、文全体としてはマトリックス言語の文法が常に支配しているが、局部的にはゲスト言語の文法が支配するということである。東（2000, p.72）はマトリックス言語を大海、ゲスト言語の部分を自治独立国となぞらえて次のように説明している。「いってみれば、大海というマトリックス言語がどこに自治独立国をおくか決めることができるが、その内部については口出しができない、つまり自治独立国内ではゲスト言語の文法が生きているということになる。」

〔例２〕私は電車でhigh schoolへ行った。

〔例３〕私は電車でhigh schoolへ行った because it was raining.

〔例４〕私は電車でhigh schoolへ行った because it was raining 今朝.

〔例２〕のマトリックス言語は日本語であり、英語の名詞「high school」が切り替わっている。「high school」は内容語である。〔例３〕のマトリックス言語は日本語である。「High school」と「because it was raining」が切り替わっている。「because it was raining」は、節のレベルでのCSであり副詞節として働いている。副詞節も内容語であり、内容語のCSである。〔例４〕のマトリックス言語も日本語である。副詞節は「because it was raining今朝」であり、この節の中でCSがみられる。日本語にCSをした「今朝」はゲスト言語である。「今朝」は内容語であり、FCHに合致する。また、この副詞節も文全体を支配するマトリックス言語のフレームにおさまっており、FCHに合致する。

〔例４〕私は電車でhigh schoolへ行った because it was raining 今朝.

・文全体のマトリックス言語：日本語
・文全体から見たゲスト言語：英語
・節のマトリックス言語：英語
・節の中でのゲスト言語：日本語

〔例２〕、〔例３〕ではマトリックス言語とゲスト言語は平面的な構造であるが、〔例４〕では、マトリックス言語とゲスト言語の組み合わせが多重構造になっている。

金（2001）[12]は、在日コリアン一世の日本語習得過程で見られる混用複合動詞の生成をフレームとコンテントの移行過程で説明している。まず、コンテントが移行し、次にフレームが移行すると説明している。ここでは、最終的にフレームが日本語に移行する際に、既存のコンテントの活用がフレームとの接続と合致しないため、最終的には独自の形態を成すものがあると述べている。

郭（2006）[13]は、韓国の帰国子女によるCSの形態とその特徴を論じている中で、日本語と韓国語は語順も文構造も類似しており、容易にスイッチができそうだが、実際は、主に実質的な意味を持つ文節を単位にして切り替えていると述べている。

Nishimura（1997）[14]は、カナダ在住の日系人によるCSを機能的、統語的に研究しているが、文中CSの統語を論じた章のNotes（p.129）でAzuma（1993）のFCHについて次のように述べている。

Ⅰ. [Watashi ga katta] book wa takai.（brackets added）
　　“The book I bought is expensive.”
Ⅱ. *[Watashi ga katta] the book wa takai.

AzumaはⅠにおいて、FCHによると、日本語のフレームがまず作られ（これは冠詞のための場所がないことを意味する）、次のコンテント挿入ステージで英語の名詞が入れられる。Ⅱにおいては、一方、英語のフレームがまず作られ（theの場所がある）、次のコンテント挿入のステージでは英語は連体修飾する節が名詞の後ろに来るため、英語の関係詞節が挿入されなけ

ればならない。Azumaの仮説では英語の名詞句が日本語の関係詞節によって先行されるⅡのようなケースを説明できない。

金は、Azumaの文産出の二つのステージを用いて、在日コリアン一世の日本語習得過程で見られる混用複合動詞の生成を説明しているが、FCHの検証はしていない。郭は韓国の帰国子女によるCSでは、内容語のスイッチ、あるいは文節でのスイッチが見られることを述べており、FCHの検証が行われているといえるだろう。Nishimura は日本語英語の文中CSにおいて、FCHでは説明できない点を指摘している。

4．会話資料

筆者が収集した日本語英語バイリンガルによる会話資料を用いて、FCHの検証をしていく。この会話資料のインフォーマントは18歳から21歳の日本語英語バイリンガル大学生男女7人であり、同大学同学部の友人同士、あるいは高校時代からの友人であるなど、知己の仲である。打ち解けた雰囲気の中で自由会話をしてもらった。会話資料は二人あるいは三人の会話四つ（会話A、会話B、会話C、会話D）である。2007年12月26日27日 と2008年 1月 4日 に、東京都文京区の公共施設と筆者宅で収集した。テープレコーダで録音した後、文字起こしを行った。

会話の長さは、会話Aは24分33秒、会話Bは30分30秒、会話Cは21分15秒、会話Dは30分11秒である。文中CSの数は、会話Aでは35、会話Bでは64、会話Cでは80、会話Dでは23あった。全ての会話において、名詞、名詞句、名詞節の文中CSが一番多く、会話Aでは21（60％）、会話Bでは45（70％）、会話Cでは24（30％）、会話Dでは14（61％）である。

5．会話資料の文中CS とFCHの検証

文中でCSがなされたものが内容語であり、それらがマトリックス言語のフレームを侵害しないものであることを確かめることで、FCHを検証していく。例文には、必要に応じて和訳を付けた。

（1）　名詞・名詞句・名詞節

名詞、名詞句の文中CSの例をあげながら検証していく。

〔例５〕'Cause last week you were going to, but they're like, 緊急ミーティング.
先週、あなたは行くつもりだったけれど、緊急ミーティングのようなものがあったから。

〔例６〕あと、ま　Asian studiesでもいいかなって思って。

〔例５〕のマトリックス言語は英語であり、日本語「緊急ミーティング」がCSをしている。

表1　会話A・B・C・Dの時間と、文中CSの種類と数

文中CSの種類	会話A	会話B	会話C	会話D
	（24分33秒）	（30分30秒）	（21分15秒）	（30分11秒）
名詞・名詞句・名詞節	21	45	24	14
動詞	0	2	2	0
形容詞・形容動詞・形容詞句	3	1	13	0
副詞・副詞に類するもの	3	4	9	3
接続詞	1	0	4	0
引用文	1	6	4	0
感動詞	5	6	21	5
文末に付くもの	1	0	3	1
合計	35	64	80	23

「緊急ミーティング」は内容語の一つ、名詞である。このCSはFCHにおける内容語挿入ステージでのCSである。〔例６〕のマトリックス言語は日本語であり、英語「Asian studies」がCSをしている。「Asian studies」は内容語の一つ、名詞句である。このCSはFCHにおける内容語挿入ステージでのCSである。

（２）　動詞

動詞の文中CSを検証する。

〔例７〕sellしたほど（手数料がもらえる）。
売ったほど。

〔例８〕留学生って、あんまりmix and mingle しないよね。
留学生って、あんまり交わって付き合わないよね。

〔例７〕のマトリックス言語は日本語であり、英語「sell」がCSをしている。「売る」に値する英語の動詞の原型「sell」を入れ、「した」を続けることによってテンスを表している。言い換えれば、テンスを表す「した」によって文法構築がなされた中に内容語がCSをしたものである。〔例８〕のマトリックス言語は日本語であり、英語「mix and mingle」がスイッチしている。「交わって付き合う」に値する英語の動詞の原型「mix and mingle」を入れ、「する」を語形変化させた「しない」を続けることによって、否定の意味を表している。「しない」を用いて、文法構築がなされた中に内容語がCSをしたものである。

（３）　形容詞・形容詞句・形容動詞・形容動詞句

形容詞句の文中CSを挙げて検証する。

〔例９〕Yeah, there's like 超すごいから。
うん、そこはなんか超すごいから。

〔例９〕のマトリックス言語は英語であり、日本語「超すごい」がスイッチしている。「超」は接頭辞として、本来名詞に先行し、程度が特に普通以上であることを意味する。しかし、俗語として形容詞、副詞、動詞などにも先行し副詞的にも用いられる。ここでは形容詞「すごい」に「超」が先行して形容詞句を作っている。よって、「超すごい」は内容語のCSであり、FCHに合致する。

（４）　副詞・副詞に類するもの

副詞、副詞に類するものの文中CSを検証する。

〔例10〕なんか、よくI don't know.

〔例11〕So we're 囲まれて（い）る in the beach and the mountain.（「い」は筆者が追加）
だから、私たちは（そこは）海岸と山に囲まれている。

〔例10〕のマトリックス言語は英語であり、日本語「よく」がCSをしている。「よく」は副詞であり、内容語であることからFCHに合致している。

文頭の「なんか」は「なにか」が音変化したものであり、感動詞の一つである。感動詞については後述する。

〔例11〕のマトリックス言語は英語である。「we're 囲まれている」の中で、「囲まれている」が日本語にCSをしている。この「囲まれている」は様態を表す一種の副詞として働いている。しかし、助動詞「are」が存在しているにも関わらず、日本語の助動詞「いる」が再度現れるのはフレーム構築ステージでCSがなされていることを表す。では、「囲まれている」の構成を分析しよう。「囲む」の未然形に、助動詞「れる」の連用形と助詞「て」が続き、さらに、助動詞「いる」が続いている。動詞は語幹と活用語尾は密着しており、「囲まれ」が一単位として用いられるが、「囲まれ」あるいは「囲まれて」で途切れると、接続を感じさせる。そこで、「いる」と続けることで、状態を言い表すことができる。よって、「囲まれている」は一種の副詞として働いていると捉える事ができる。よって、FCHに合致すると思われる。

（５）　接続詞

接続詞の文中CSについてFCHの検証を行う。

〔例12〕それと、uuum something with business.
それと、うーん、ビジネスの何か（を履修し

ようと思っている)。

〔例12〕の発話の前は、英語で来学期の履修科目について話している。〔例12〕のマトリックス言語は英語であり、文頭に日本語の接続詞「それと」がCSをしている。接続詞は文頭あるいは節の間に置かれるものである。文頭において、CSをした「それと」はマトリックス言語のフレームに抵触しておらず、FCHに合致する。

(6) 引用

引用の部分でCSをしたものの具体例を示す。表1からわかるように、引用の文中CSは比較的多く見られる。

〔例13〕And my grandma's like うん、そうだよ。おめでとう。あけましておめでとう。

〔例13〕のマトリックス言語が英語であり、「's like」によって、引用節が入る場所が作られ、そこに日本語にCSをした「うん、そうだよ。おめでとう。あけましておめでとう」が入っている。これはFCHに合致する。

(7) 感動詞

感動詞には、感嘆詞、挨拶、応答詞、フィラーが含まれ、他の文節とは、比較的独立して用いられる。感嘆詞は「ああ」「わあ」など、感動を表す、語彙的には未分化の表現である。英語では「oh」「wow」などがある。応答詞は「うん」「いいえ」「はい」などがある。英語の応答詞としては「yes」「no」などがある。フィラーは、形式として「あのう」「えーと」「ああ」「うう」などがあり、つなぎことばとも言う。発話の途中で発話の続行の意図があることを示す表現であるが、会話の相手が発話の順をとるために使うこともある。英語では「umm」「uh」「well」「you know」「like」などがある。〔例10〕の「なんか」は副詞と助詞で形成された連語であるが、間を持たせるために用いられているため、発話の中での役割としてフィラーの一つとして扱ってもよいと考えられる。

感動詞の独立性により、感動詞のCSはフレームに抵触せず、感動詞のCSはFCHに合致することは自明であるが、具体例を示しておく。

〔例14〕そう、I don't want to work for〈N〉.
(〈N〉は筆者加筆)
そう、僕はNのためには働きたくないんだ。

〔例14〕の文が未完で終わっているのは、会話の相手にターンが移ったからである。「そう」は感動詞であり、内容語であり、活用はせず他の部分から比較的独立している。この例のマトリックス言語が英語であるが、そのフレームに抵触しておらず、FCHに合致する。

(8) 文末に付加されるもの

終助詞や終助詞的に用いられるものの文中CSを検証する。

〔例15〕(略) that's exactly what exchange rate is じゃん。
交換レートってまさにそういうことじゃん。

〔例15〕のマトリックス言語が英語であり、終助詞「じゃん」が文末に付加されている。「じゃん」に先行する物が文として完結しており、「じゃん」は独立しているためマトリックス言語のフレームを侵害しておらず、FCHに合致する。

(9) 繰り返し

一つの言語で話している時、言い直しや言い換えをすることがある。聞き手に理解されない、あるいは聞き手に理解されなかったと推測した場合、話し手は咄嗟に言い直しや言い換えを行うが、聞き手に理解されない理由には、話し手の不適切な語彙使用や不明瞭な発音などが考えられる。また、補足説明を行うための言い換えもある。同様の意味内容を持つ語を文中CSによって繰り返す例を検証する。

〔例16〕exchangeで行けるとこ、ああ交換留学でその、なんだろ、大学の授業料とかtuition feeとか払わなくても、○○ので行ける、でも結構限られていたから、そういうのでいくと、ま、カナダが多かったからって感じ。(○○は大学名)

〔例16〕のマトリックス言語は日本語であり、「exchange」と「tuition fee」がCSをしている。「exchange」も「tuition fee」も名詞である。CSをした「exchange」は後に「交換留学」と再度同様の意味を持つ内容語が日本語で発話され、

「tuition fee」はその前に「大学の授業料」という、同様の意味を持つ内容語が日本語で発話されている。「tuition fee」は、言い換えを行う中で起きた名詞のCSである。「exchange」は（1）で検証した名詞のCSである。両者共、FCHに合致している。なお、〔例16〕の発話を行った話者は、もう一方の言語による言い換えを行わなくても事柄は聞き手に十分伝わるのだが、CSをしながら話すという会話スタイルに合わせようとしたものと思われる。

（10）　フレームの重層化

CSが行われた部分の前半部分はマトリックス言語のフレームの中に入るが、CSの後半部分がマトリックス言語のフレームに収まらないものがある。その具体例を示し、検証する。

〔例17〕Ummmm their accent's pretty good, because for Spanish if you speak in like カタカナっぽく言ったら、it kind of sounds like Spanish だから.

うーん、スペイン語はなんかカタカナっぽく言ったら、それは、ちょっとスペイン語のように聞こえるから、彼らの発音はかなりいいよ。

まず、「it kind of sounds like Spanish だから.」の部分を分析しよう。この節の述部は日本語の助動詞「だ」なので、マトリックス言語は日本語である。助動詞「だ」の終止形に理由を表す接続助詞「から」が後続している。しかし、助動詞「だ」は主として名詞に後続して名詞文を作るが、その前の部分は名詞文ではない。また、「だ」を形容動詞の活用語尾と解釈もできない。しかし、話し手は「it kind of sounds like Spanish」が理由であることを示すためには「から」を後続させなければならず、「から」を後続させるためには、何らかの終止形が必要なのである。そこで名詞「Spanish」で終わっているため、名詞に続いて文を完結させる助動詞「だ」を用いたと考えられる。「Spanish」が文中CSをしていると捉え、「Spanish」を「だから」が作るフレームに挿入される内容語としてみなすと、「Spanish」は日本語のフレームの内容語として存在することになり、FCHに合致する。「Spanish」は「it kind of sounds like Spanish」の内容語であり、同時に「Spanish だから」の内容語として働いている。

it kind of sounds like Spanish　だから
～～～～～～～～～～

マトリックス言語：英語

マトリックス言語：日本語

次に「if you speak in like カタカナっぽく言ったら」を分析しよう。マトリックス言語を英語として分析する。「if you speak in like」に後続するものは名詞か名詞句である。「カタカナ」だけであれば、内容語のCSのため、FCHに合致する。すなわち、「if you speak in like カタカナ」は日本語の名詞が挿入された完結した節となる。しかし、話し手は「っぽく言ったら」と発話を続けている。「カタカナっぽく言ったら」も完結した節になっており、「if you speak in like カタカナ」が表す事柄と「カタカナっぽく言ったら」が表す事柄は同一であり、前者が英語のフレームでできた節、後者は日本語のフレームでできた節になっている。「カタカナ」がそれぞれの節の内容語として働いている。

If you speak in like カタカナ っぽく言ったら
～～～～～～～～～～～～～～

マトリックス言語：英語

マトリックス言語：日本語

〔例18〕And you have mom's 着物だっけ.

それで、あなたはお母さんの着物を持っているんだっけ。

まず、「And you have mom's 着物」の部分を分析しよう。このマトリックス言語は英語であり、日本語の名詞「着物」がCSをしており、FCHに合致する。

次に、「mom's 着物だっけ」を分析しよう。「け」は思い返しや気付きの意を持つ終助詞であり、終止形に後続する。「け」を用いるためには何らかの終止形が必要であり、ここでは助動詞「だ」が「け」に先行している。CSをした「着物」が名詞であるため、名詞に続いて文を完結させる助動詞「だ」を用いたと考えられる。しかし、助動詞「だ」を用いることで日本語のフレームができあがり、「mom's 着物だっけ」という一つの節が完成したことになる。すなわち、「And you have mom's 着物」の節と

「mom's 着物だっけ」の節が「mom's 着物」を共有しながら、それぞれの節を完結させるというフレームの重層化が見られる。

And you have mom's 着物　だっけ.
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
マトリックス言語：英語
マトリックス言語：日本語

上述の〔例17〕〔例18〕の分析から、内容語の文中CSをきっかけに、CSの言語による新たなフレームを作り、CSをした内容語は、同時に両フレームの内容語として働くことがあることを確認できた。

6．おわりに

バイリンガルのインフォーマルな会話の中で見られる文中CSについてFCHの検証を行った。文中CSをするものが、名詞、名詞句、名詞節、動詞、形容詞、形容詞句、形容動詞、形容動詞句、副詞、副詞に類するもの、文末に付加するもの、感動詞、引用部分などであり、マトリックス言語で構築されたフレームの中でCSが行われている。すなわち、文中CSは内容語挿入ステージで起こり、文中CSがFCHに概ね合致するものであることが確認できた。小論では紙面の都合上、全ての具体例を示すことはできなかったが、概ね全体を網羅したつもりである。

また、同時に、内容語の文中CSがフレームの重層化をもたらすことがあることが新たにわかった。先行する節がその節の末部にある内容語と、後続する節がその節の頭部にある内容語を共有しながら、それぞれのフレームの中に、そのマトリックス言語の文法に抵触することなくおさまっている。つまり、文中CSは内容語挿入ステージで起きるが、文中CSはフレーム構築ステージに何らかの刺激を与えるということである。

以上、バイリンガルの一会話スタイルである文中CSの文法的正当性について述べてきた。バイリンガルたちは文中CSをしながら澱むことなく会話を続けていく。バイリンガルが二言語のフレーム構築も内容語挿入も自在に行うことができる能力を持った人と捉えるなら、制限のないインフォーマルな会話においては、バイリンガル能力を縦横に発揮してコミュニケーションするのは、ごく自然なことと言えるだろう。バイリンガルはモノリンガルのように、一つの会話において一つの言語のみを用いて会話をすることもあるが、二つの言語で会話を成立させることもある。バイリンガルは一つの言語だけによる会話、もう一方の言語だけによる会話、両言語を切り替えながら行う会話、すなわちCSをする会話の三種類の会話スタイルを持つ。多言語話者と、あるいは多言語話者同士で共存するためには、会話スタイルの多様性を受け入れていくことが必要と思われる。今後、CSに対する日本語母語話者の受け止め方が変化していくと思われるが、その受け止め方の新たな調査は次の課題としたい。

【註】

1）法務省入国管理局統計
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_090710-1_090710-1.html2011年8月10日採取

2）国籍留保とは外国で生まれた日本国民で、かつ、出生により外国国籍も取得したものは重国籍者となるが、日本国籍を失わないようにするため出生から３ヶ月以内に届け出ること。法務省民事局『平成９年度戸籍事件表（平成９年４月１日〜平成10年３月31日）』平成10年９月、『平成18年度戸籍事件表（平成18年４月１日〜平成19年３月31日）』平成19年９月

3）地域別子女数とは日本国籍を持つ小・中学校就学年齢の子供の数。外務大臣官房領事移住部領事第二課『海外在留邦人数調査統計』昭和52年（昭和51年10月１日現在）、『海外在留邦人数調査統計』昭和62年（昭和61年10月１日現在）、外務大臣官房領事移住部領事移住政策科『海外在留邦人数調査統計』平成９年（平成8年10月１日現在）、外務大臣領事局政策課『海外在留邦人数調査統計』平成19年版（平成18年10月１日現在）

4）平成20年３月28日に小学校学習指導要領の改訂を告示し、新学習指導要領では小学校５・６年で週１コマ「外国語活動」を実施し始めた。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm　2011年８月10日採取

5）日本人学校とは海外に在留する日本人のために「学校教育法」に規定する日本国内の学校と同等の教育を行うことを目的とした全日制の教育施設である。2004（平成16）年時点では世界各地に82校開校されている。

6）詳しくは筆者の「日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング」『目白大学人文学研究』第７号、（2011）を参照願いたい。

7）Azuma（1990, 1993）はFCHという名称をLindblom, Bjorn、MacNeilage, Peter、Studdert-Kennedy, Michaelの三氏が出版する予定である*Evolution of Spoken Language*から“frame-content”という語を借用している。筆者が調査した限りでは、その著書は出版されておらず、東氏にも問い合わせをしたが、2011年10月１日時点において返事をいただいていない。一方、1990年にMacNeilage, PeterはDavis, Barbaraとの共著の中で“the frame/content hypothesis”という語を用いている。MacNeilage, Peterらはthe frame/content hypothesisという章の中で、音韻レベルにおける子音母音の入れ替えに関して論じ、乳児は喃語を発しながら、まずフレームを作り、それから内容語をフレームに入れていくと述べている。

【引用文献】

1　山本雅代『バイリンガル - その実像と問題点』大修館（1991）

2　Fururya, Noriko. “Attitude Toward Japanese-English Code-Switching”,『文化女子大紀要人文・社会科学研究』pp.29-42（1999）

3　Appel, Rene, & Muysken, Pieter. *Language contact and bilingualism*, London: Edward Arnold,（1987）

4　Kite, Y.. *Japanese/English codeswitching: The structure of codeswitching as an unmarked choice and its relation to language proficiency*, Michigan: UMI dissertation services. A Bell and Howell Company,（1996）

5　中島和子『バイリンガル教育の方法』アルク（1998）

6　Azuma, Shoji. *Frame-Content Hypothesis and Code-switching*,『英文学：研究と観賞』66巻　早稲田大学英文学会編pp. 130-121,（1990）

7　Azuma, Shoji. *Frame-Content Hypothesis in speech production: evidence from intrasentential code-switching*, Linguistics: an international review. 31, pp. 1071-1093,（1993）

8　東昭二『バイリンガリズム　二言語併用はいかに可能か』講談社（2000）

9　ジョン・ガンパーズ 『認知と相互行為の社会言語学　ディスコース・ストラテジー』 井上逸平他訳、松柏社（2004）

10　岡秀夫 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』溪水社pp.122 - 125（1995）

11　Garrett, Merrill F.. *Production of speech: observations from normal and pathological language use,* Ellis, Andrew W.. Normality and pathology in cognitive functions Academic Press,（1982）

12　金美善「在日コリアンの混用コードについて―大阪市生野区周辺における言語接触の観点から」『青丘学術論集』第19集、韓国文化研究振興財団pp.273-300（2001）

13　郭銀心「韓国の帰国子女の言語生活―日本語と韓国語間のコードスイッチングを中心に―」『韓国人による日本社会言語学研究』おうふうpp.201-222（2006）

14　Nishimura, Miwa. *Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics*, New York: Peter Lang Publishing,（1997）